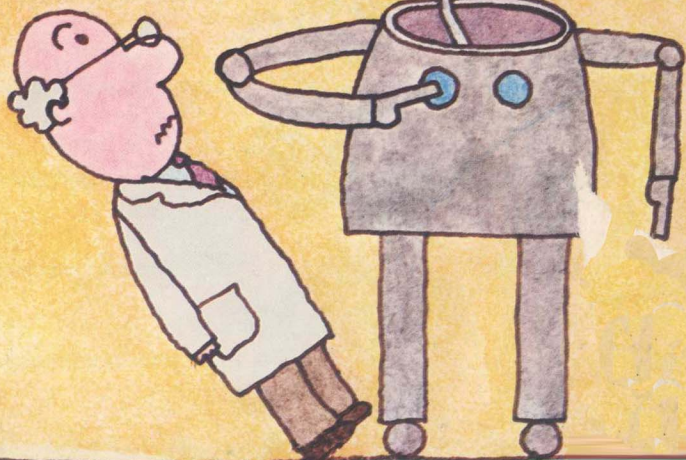


星新一

ままぐれ
ロボット



角川文庫

きまぐれロボット



昭和四十七年一月五日 初版発行
昭和五十四年三月二十日 三十八版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著者 星 新一

発行者 角川春樹

印刷者 橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二②東京③一九五三〇八 株式
会社 角川書店
電話東京(265)セニ(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 新興印刷・本間製本

0193-130303-0946(2)

きまぐれロボット

星 新 一

目次

新発明のマクラ	試作品	薬のききめ	悪魔	災難	九官鳥作戦	きまぐれロボット	博士とロボット	便利な草花	夜の事件	地球のみなさん	ラッパの音
---------	-----	-------	----	----	-------	----------	---------	-------	------	---------	-------

五 五 四 三 二 一 二 三 四 五 六 七

おみやげ

夢のお告げ

失敗

目薬

リオン

ボウシ

金色の海草

盗んだ書類

薬と夢

なぞのロボット

へんな薬

サーカスの秘密

鳥の歌

火の用心

スピード時代

キツツキ計画

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

ユキコちゃんのしかえし

ふしぎな放送

ネコ

花とひみつ

とりひき

へんな怪獣

鏡のなかの犬

あーん。あーん

解説

二七

二三

二五

二四

二九

二五

二七

二六

二七

谷川 俊太郎
和 田 誠
さし絵

新発明のマクラ

「さあ、やっと大発明が完成したぞ」

小さな研究室のなかで、エフ博士は大声をあげた。それを耳にして、おとなりの家の主人がやってきて聞いた。

「なにを発明なさったのですか。見たところ、マクラのようですが」

そばの机の上に大事そうに置いてある品は、大きさといい形といい、マクラによくにていた。

「たしかに、眠る時に頭をのせるためのものだ。しかし、ただのマクラではない」

と、博士はなかをあけて指さした。電池や電気部品が、ぎっしりとつまっている。おとなりの主人は目を丸くして質問した。

「すごいんですね。これを使うと、すばらしい夢でも見られるのでしょうか」

「いや、もっと役に立つものだ。眠っていて勉強ができるしかけ。つまり、マクラのなかにたくわえてある知識が、電波となって、眠っているあいだに頭のなかに送りこまれるというわけ

だ」

「なんだか便利そうなお話ですが、それで、どんな勉強ができるのですか」

「これはまだ試作品だから、英語だけだ。眠っているうちに、英語が話せるようになる。しかし改良を加えれば、どんな学問でも同じことになるだろう」

「驚くべき発明ではありませんか。どんななまけ者でも、夜、これをマクラにして寝ていさえすれば、なんでも身につけてしまうんですね」

おとなりの主人は、ますます感心した。博士はとくいげにうなずいて答えた。

「その通りだ。近ごろは努力をしたがらない人が多い。そんな人たちが買ったがるだろう。おかげで、わたしも大もうけができる」

「ききめが本当にあるのでしたら、だれもがほしがるにきまっていますよ」

「もちろん、ききめはあるはずだ」

おとなりの主人は、それを聞きとがめた。

「とおっしゃると、まだたしかめてないのですか」

「ああ、わたしはこの研究に熱中し、そして完成した。しかし考えてみると、わたしはすでに英語ができる。だから、自分でためしてみることができないのだ」

と、博士は少し困ったような顔になった。おとなりの主人は、恥ずかしそうに身を乗り出して

言った。

「それなら、わたしに使わせて下さい。勉強はいやだが、英語がうまくなりたいと思っていたところです。ぜひ、お願いします」

「いいとも。やれやれ、こうすぐに希望者があらわれるとは思わなかった」

「どれくらいかかるのでしょうか」

「一か月ぐらいで、かなり上達するはずだ」

「ありがとうございます」

と、おとなりの主人は、新発明のマクラを持って、うれしそうに帰っていった。しかし二か月ほどたつと、つまらなそうな顔で、エフ博士にマクラを返しにきた。

「あれから、ずっと使ってみました。いっこうに英語が話せるようになりません。もうやめます」

博士はなかを調べ、つぶやいた。

「おかしいな。故障はしていない。どこかがまちがっていたのだろうか」

だが、ききめがなければ使い物にならない。せっかくの発明もだめだったようだ。それからしばらくして、エフ博士は道でおとなりの女の子に会い、声をかけた。

「そのご、おとうさんはお元気かね」

「ええ。だけど、ちょっとへんなこともあるわ。このごろ、ねごとを英語で言うのよ。いままで、こんなことなかったのに、どうしたのかしら」

眠っているあいだの勉強が役に立つのは、やはり、眠っている時だけなのだった。

試作品

エム博士の研究所は静かな林のなかにあった。博士はそこにひとりで住んでいた。町から遠くはなれているので、だれもめったにたずねてこない。しかし、ある日、あまり人相のよくない男がやってきた。

「どなたでしょうか」

と博士が聞くと、男はポケットから拳銃を出し、それをつきつけながら言った。

「強盗だ。おとなしく金を出せ」

「とんでもない。わたしは貧乏な、ただの学者だ。もっとも、長いあいだの研究がやっと完成したから、まもなく景気がよくなるだろう。しかし、今のところは金などない」

こうエム博士は答えたが、そんなことで強盗の引きさがるわけがなかった。

「では、その研究の試作品をよこせ。どこかの会社に持ちこんだら、高い金で買いとってくれるだろう」

「だめだ。渡さない。ひとの研究を横取りしようというのは、よくない精神だぞ」

「それなら、ひとりで探し出してみせる」

強盗は、逃げ出さないようにと、博士の手を引っぱって、研究所のなかを調べてまわった。しかし、試作品らしいものは、どこにも見あたらなかった。

最後に小さな地下室をのぞいた。なかはがらんとしていて、机とイスが置いてあるだけだった。強盗は博士に言った。

「どうしても渡さない気なら、ただではすまないぞ」

「拳銃の引金をひくつもりなのか」

「いや、殺してしまつては、品物が手に入らない。いやでも渡す気になる方法を考えたのだ。さあ、この地下室に入れ」

「いったい、わたしをどうしようというのだ」

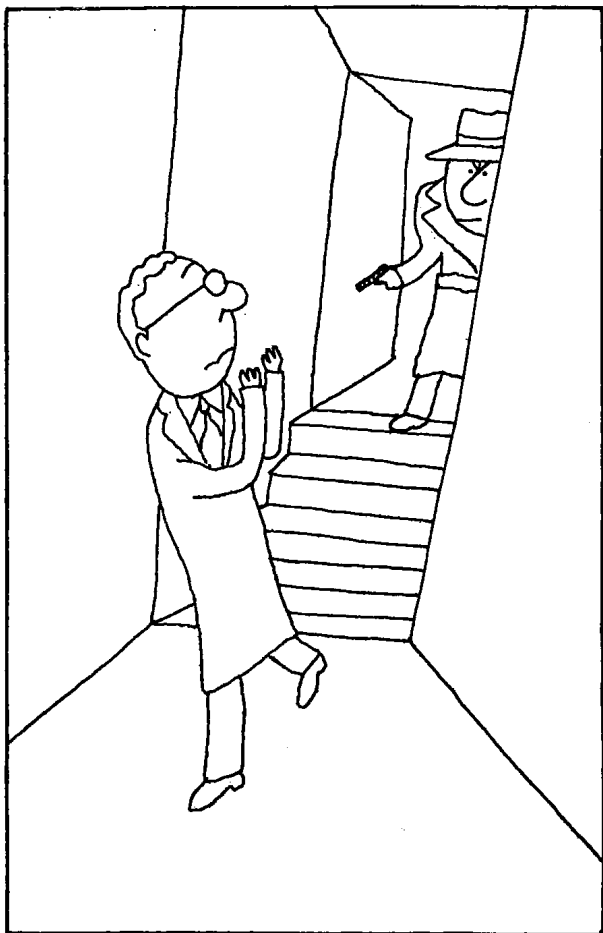
「あなたを、このなかにとじこめる。おれは入口でがんばることにする。そのうち、空腹のため悲鳴をあげるだろう。品物を渡す気になったら、すぐに出てやる」

「ひどいことを思いついたな。だが、そんな目にあわされても、決して渡さないぞ」

博士はあくまでことわり、ついに地下室に押しこまれてしまった。

かくして一日がたった。強盗は入口の戸のそとから声をかけた。

「さぞ、おなががすいたことだろう。いいかげんであきらめたらどうだ。こっちには食料があ



るから、当分は大丈夫だぞ」

「いや、わたしは絶対に負けないぞ」

「やせがまんをするなよ」

しかし、その次の日も、そのまた次の日も同じことだった。声をかけると、なかで博士が元気に答える。時には、のんきに歌う声も聞こえてくる。

一週間たち、十日が過ぎた。まだ博士は降参しない。そのころになると、強盗のほうが弱ってきた。手持ちの食料もなくなりかけてきたし、戸のそとでがんばっているのにもあきたのだ。それに、なにも食べないでいるはずなのに、あいかわらず元気な博士が、うすきみ悪く思えてきたのだ。

「もうあきらめた。いつまでいても、きりがなさそうだ。引きあげることにするよ」

強盗はすぐごと帰っていった。エム博士は地下室から出てきて、ほっとため息をついた。それから、こうつぶやいた。

「やれやれ、やっと助かった。試作品が地下室にあったとは、強盗も気がつかなかったようだ。わたしの完成した研究とは、食べることでできる机やイスを作ることだったのだ。おかげで、その作用を自分でたしかめることになってしまった。栄養の点はいいが、もう少し味をよくする必要があるようだ。きっと将来は、ロケット内や宇宙基地での机やイスには、すべてこれが使われ

るようになるだろう。そして、万一の場合には、大いに役に立つにちがいない」